
君色の花

祐銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君色の花

【Nコード】

N2134Y

【作者名】

祐銘

【あらすじ】

好奇心に負けて踏み込んだ一步が、二人の始まりだった――
神社に住み着いている童女の霊と、一人の男子高校生の、奇妙で優しい物語。

導かれて

*** 導かれて ***

昔、豊作祈願や雨乞いの為に「生贄」が神に捧げられるという例は珍しくなく、一部の地域ではつい最近まで行われていた。特に生贄が人間である場合は「人身御供^{ひとみぐう}」といい、俺の住む村では人身御供が祖母の幼かった頃にも行われていたらしい。

行われていた人身御供の儀式について、俺は詳しいことは知らない。知っていることといたら、儀式が森の中にある御鳥神社^{みどりじんじや}で行われていたということと人柱が若い女子だったということくらいだ。御鳥神社の鳥居の前に、俺はいた。下校中に森の前を通った際、森の中から聞こえてきた鈴の音を辿ってきたらたどり着いたのだ。

そういえば、この神社に来たのは2度目である。最初に来たのは小学2年生の頃、祖母に連れられてきた。人身御供の話聞いたのはその時だ。自分がいるこの場所ですのような儀式が行われていたということを、とても恐ろしく感じたのを今でも覚えている。それから一度もこの神社に来ようとは思わなかった。

十年間も近づくことを躊躇^{ためら}っていたこの場所に、しかも一人来てしまった。鈴の音はもう聞こえない。しかし、この鳥居の内側から聞こえてきていたのは確かである。鈴の音の正体への好奇心と、鳥居の中へ立ち入ることへの恐怖。しばしの葛藤の末、好奇心が勝った。

鳥居を潜ると、自分を纏う空気が変わった気がした。入らなければ良かったと少し後悔したが、戻ろうとは思わなかった。戻ろうと思えばいつだって戻れる。

俺は辺りを見渡した。神社の至る所には、祀ってある鷹に似た鳥の絵や石像がある。この鳥は「御鳥様^{みどり}」と呼ばれ、御鳥神社の名の

由来でもある。御神体を祀ってある神殿は老朽化が進んでいて、いつ壊れてもおかしくない状態だ。しかし修復の話は聞いたことがない。

その神殿の周りを回ると、裏に井戸があつた。今は埋められているが、人柱はこの井戸に投げ入れられたらしい。井戸は黄泉よみの国へ通じると考えられていたと聞いたことがあるが、井戸へ投げ入れるという行為はそこから来たのだろうか。今もこの中には、犠牲となつた少女たちが眠っているのだろう。少女達は何を想いながら人柱になったのか、当時の様子を知らない俺には知る術はない。

さわさわと、緑の木の葉が揺れる音がする。他に音はなく、ひとけ人気がない場所がよりいっそう寂しい。辺りは薄暗くなっていて、肌寒い。昼間の茹だるような暑さが嘘のようだ。夕刻の森の中とはいえ、この涼しさは明らかに異常だ。そう思った瞬間、好奇心で押さえ込まれていた恐怖心が一気に沸いた。急いで踵を返そうとする。その時、ちりん。と、背後で澄んだ鈴の音が聞こえた。俺をここまで導いてきた音。背筋が凍った。

しばらくそのままの状態で固まっていたが、このままでいるわけにもいかない。勇気を振り絞って、ゆっくりと、振り返る。くすんだ桃色の着物を着た少女が立っていた。

約束

*** 約束 ***

「大和^{やまと}が花に興味あったなんて、初めて知ったな」

図書館で草花図鑑を広げている所を同級生かつ親友の和也に見られ含み笑いでそう言われた時、俺は僅^{わず}かな羞恥^{しゅうちん}心を覚えた。含み笑いが、「男のくせに」とか「この歳で」とか言っているような気がした。

「別に。たまたま見つけた花の名前が、ちょっと気になったただけだよ」

「ふーん」と言いながら和也が図鑑を覗き込んできた。

「萩？」

「うん」

咲いている花を見たわけではないが、花期が七月から十月という記述を確認していたので自信を持って頷くと、なぜか笑いが返ってきた。

「萩の花が咲くのは、この辺じゃあと一月^{ひとつき}も先だぜ？」

「……え？」

顔が火照ってきたのがわかる。今、ものすごく恥ずかしい。

「じゃ、俺帰るから」

和也が出て行くのを、俺は複雑な気持ちで見送った。溜息でも吐きたい気分だ。

図鑑に目を落とすと、想像していたよりも綺麗な薄紫色をした萩の花の写真が、昨日会った少女を思い起こさせた。

「この色はね、萩色っていうんだよ」

「落ち着いた桃色だね」と、「地味」とか「くすんだ」という言葉避けて着物の色についてコメントした俺に、少女は笑いながら教えてくれた。秋の七草にそんな名前のものがあった気がした。

後ろに立っていた少女を見た時、一目でこの世の人ではないとわかった。なぜかと聞かれれば上手く答えられないが、なんというか、生きている感じがしなかった。しかし、不思議と恐怖は湧かなかった。外見が幼かったからだろうか。きょとん、と、ふぬけた表情をしていたからかも知れない。

少女は俺に見えること、自分の声が聞こえることを知るや否や話をしようとせがんできた。悪い子では無さそうだったので、神殿の縁側に一緒に腰掛け、日が沈むまでの短い間だったが言葉を交わした。

容姿は、肩より少し長い黒髪で、萩色の着物を着ていて裸足。帯には赤い紐が巻かれていて、一つの鈴が括り付けられていた。動くたびに鈴が鳴る。年の頃は六・七歳くらいか。

少女は何の躊躇いもなく、自分が幽霊であること、この神社の儀式で死んだということを話した。儀式で人身御供にされたという話は、俺以前に少女と会話を交えた奴に聞いたらしい。

御鳥神社に着くと、少女は縁側に腰掛けていた。昨日俺と話した場所だ。

「大和っ！」

少女は俺に気がつく、手を振ってきた。

隣に腰掛けると手に持っているそれは何かと聞いてきたので、昼休みに調べてコピーした草花図鑑の1ページを見せる。

「あ、萩！　こんなにきれいな色だったっけ」

萩の写真に夢中になっている少女を見て。すこし値段は高かったがカラーコピーにしておいてよかったと思った。

「見たいなあ……」

ぽつり、と少女が呟く。

「ここいらじゃ生えないの？」

「うん。だから死んでから見たことないよ。わたし鳥居の外には
でられないし」

図鑑の記述を見ると、なるほど、日当たりの良い場所を好むらしい。
一年中薄暗い森の中では滅多には生えないだろう。

悲しそうに俯いた少女に、俺は何ができるだろう。

答えはすぐに出た。

「あと一月くらいで花が咲くらしいから、咲いたら摘んで持っ
てくるよ」

そう言った瞬間だった。少女が、まさにその表現に相応しいほど
に、『満開の花のように』笑った。

「ホント？ 約束だよ！」

一月後、約束どおりに萩の花を摘んで行ったのなら、この少女は
またこんな風に、またはこれ以上に、嬉しそうに笑ってくれるだろ
うか。

萩色の娘

*** 萩色の娘 ***

——ちりん。

歩くたびにきれいな音でなる鈴。鈴の音は、神様をよぶんだって。神殿のおさいせん箱の前のおっきな鈴を、おまいりするまえにならすのも神様をよぶためなんだって前に祭主さまがいった。わたしの腰にずがついてるのもだからなんだって。

わたしは腰にさがつた鈴をならしながら祭主さまに手を引かれて森の中をあるく。もうまっくらで下がよくみえなくて、ときどきつまづきながらあるく。もう夏は終わってるけどまだ少しむしあつくて、汗がながれる。

わたしは今から、みどり様のところに行くんだって。えらばれたから。それはとてもありがたくて『めいよ』なことなんだって。

みどり様にお会いするのだから服はきれいじゃなくちゃっておつかさんがつくってくれたあたらしい服は、わたしが好きな萩のいろ。ぞうりもあたらしくてうれしいけれど、足にあまり合わなくてゆびの間がこすれてちよつと痛い。

神社についたら、たくさんの黒い服をきた人たちがいた。鳥居をくぐるまえに、布で目かくしをされて何もみえなくなった。これからどんなことがあるのかわからないからちよつとこわいけど、おつかさんもおとつあんも、なにもこわいことはないって言ってたからだいじょうぶ。

また手を引かれて、きつと鳥居をくぐった。なんだかへんな、呪文みたいな声がまわりからきこえる。こわくない。だいじょうぶ。いまはどこをあるいてるんだらう。きこうとしたら、ちようどとまった。だきあげられて、おろされたところは土のうえじゃなくてか

たいところ。でも手はそのまま、腰のちよっとうえのあたりをつかまれたまま。呪文みたいな声のうえに、たくさんの鈴の音がかさなった。

シャンシャン。

シャンシャン。

神様を……みどり様をよnderのかな。

しばらくそのままだったけれど、急にしずかになった。どうしたんだろうとおもったら、わたしをささえていた手がなくなって、とん、と背中をおされた。一歩まえに出たら、ちりん、とわたしの鈴がなった。足はどこにもつかなくて、おちていくわたし。なんで？

おちる、おちる、おちる——。こわいよ。

幽霊が見える人でも、わたしのことは見えないらしい。何度も『見える』人たちがきたけれど、そういう人たちに気づかれたことはない。わたしの事が見えるのは、わたしが話したいなと思って、わたしに会いたいとか話したいかと思った人だけなんだと思う。

「でも俺、君のこと知らなかったよ？」

そう言うとき大和が怪訝けげんそうな顔をして言った。

「じゃあ、井戸みてるとき、なんて思ってたの？」

大和は腕組みしながら考えて、しばらくしてから、「井戸に落とされた人柱たちは、なんて思ってたのかなって……思ってたかな」と答えた。

「なんて思ってるのか知りたいって思ったのなら、きっとそれだよ！」

今までわたしが会ってきた人たちも本当に些細な事で出会えたか

ら、条件は結構ゆるいのかも知れない。

「まあ、理由なんてどうでもいいんだけどね。大和に会えたのは変わらないんだし」

「俺はちよつと気になるんだけど……」

「だってわからないじゃん」

「それもそうか」と言ったものの、やっぱり大和は納得のいかな顔。前に萩のことをわざわざ調べてきたみたいに、わからないことはわからないままにしたいくない性分みたい。

最近は大和が見える人が全然現れなくて、十数年ぶりにできた話し相手の大和。彼は、わたしが質問して答えられなかったら、次の日には答えを持ってきてくれる。真面目すぎるくらい真面目な大和が、わたしは好きだ。でも……

「大和もいつかわたしの事、見えなくなっちゃうんだよね……」

「え？」

「今まで会って来た人たちはみんな、時間が経つとわたしのこと見えなくなっちゃったから」

正確に言うと、大人に近づくと、かもしれない。わたしを見つけてくれた人は、今までみんな子供だった。みんな大和くらいの年頃になると見えなくなってしまうたようだから、大和にわたしの姿が見えるとうかつた時はすぐびっくりしたのだ。

「じゃ、俺ってまだまだ子供ってこと？」

「そうかも」

「なんか、複雑な心境だなあ……」

「じゃあ、大和はわたしに会えない方がいいの？」

「そういうわけじゃ……」

大和の困った顔。なんだかかわいい。

子供は見えることがあって大人は見えないのは、なんでどうしてとかどうでもよくって、今は、大和がこのままずっと会いに来てくれたらなって、それだけ思うんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134y/>

君色の花

2011年11月5日01時12分発行